

田名網敬一

記憶の冒険

Keiichi Tanaka
Adventures in Memory

国立新美術館 企画展「記憶の冒険」

2024年8月7日(水)～11月11日(日)

新 国立新美術館
THE NATIONAL ART CENTER, TOKYO

© Keiichi Tanaka. Courtesy of Nanzuka

田名網敬一 記憶の冒険

Keiichi Tanaami Adventures in Memory

展览会概要

国際的に高い評価を得る日本人アーティスト、田名網敬一(1936-)の初となる大規模回顧展です。田名網は幼少期に経験した戦争の記憶とその後に触れたアメリカ大衆文化からの影響が色濃く反映された、色彩鮮やかな作品で知られています。本展は当時の資料を含めて田名網が手掛けた膨大な作品を紹介することで、これまで包括的に捉えられることがなかった、その60年以上におよぶ活動を「記憶」というテーマのもとに改めて紐解こうとするものです。



田名網は武蔵野美術大学デザイン科に入学後、篠原有司男、赤瀬川原平、荒川修作らと出会い、彼らの活動に最前線で触れながら、1957年に日本宣伝美術会主催の日宣美展で特選を受賞します。在学中からデザイナーとして仕事を依頼されるようになり、卒業後は博報堂に入社。2年ほどで退職した後は画廊での展示に固執せず、1966年にはアーティストとしての出発点ともいえる作品集『田名網敬一の肖像』を出版します。アンディ・ウォーホルの美術やデザインといったひとつのメディアに限定しない制作方法に大きな刺激を受け、自らを「イメージディレクター」と名乗るようになります。その後、シルクスクリーンによるポスター(①)、コラージュやアニメーション、イラストレーションや絵画などの作品を精力的に手掛けるようになっていきました(②, ③)。



① 『彼岸の空間と此岸の空間』2017
顔料インク、アクリル・シリクスクリーン、ガラスの粉末、ラメ、アクリル絵具／カンヴァス
217 x 300 cm (3枚組)
タグチアートコレクション蔵

① 『1967 東京』1967
シリクスクリーン／紙
103 x 72.8 cm

② 『Wonder Woman』1967
インク、コラージュ／紙
38.5 x 48.5 cm

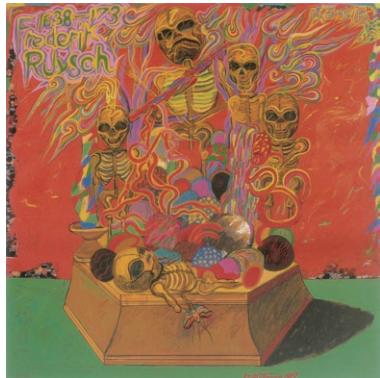
③ 『Gold Fish』1975
アクリル絵具／イラストレーションボード
36.4 x 51.5 cm

田名網敬一 記憶の冒険

Keiichi Tanaami
Adventures in Memory

1960年代後半からは音楽や映画、文芸に係る多くの雑誌のエディトリアルデザインを行い、1975年には日本版『PLAYBOY』の初代アートディレクターに就任。この頃、並行して実験映像も制作し、映像作家・松本俊夫と上映会を開催するなど表現の幅を着実に広げていきます。

1980年代は中国への旅行と1981年に経験した約4か月にわたる入院中に見た幻覚をきっかけにして、東洋的な楽園や奇想の迷宮を思わせるようなイメージを描くようになりました(④, ⑤, ⑥)。1991年には京都造形芸術大学の教授にも就任し、後進の育成にも携わるようになります。

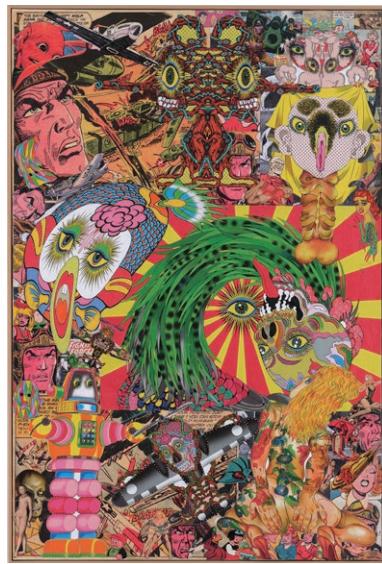
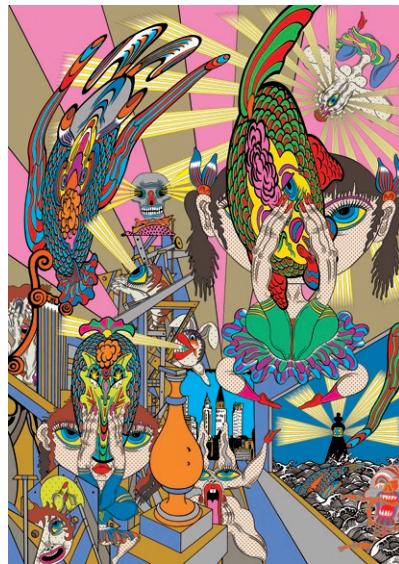


④

⑤

⑥

2000年頃からはこれまで田名網自身の作品に現れていた様々なモチーフが再び組み合わされることで、より複雑でダイナミックなイメージが展開されています(⑦, ⑧)。田名網にとって作品制作とは過去の記憶を辿っていく作業であり、記憶が自身のなかで無意識のうちに変化していく様子を捉えようとする行為でもあるのです。



⑦

⑧

88歳となった今も旺盛な創作活動を続ける田名網の存在は、世代や国を超えたアーティスト、そしてデザイナーたちを魅了し続けており、コラボレーションを求める声は後を絶ちません。これは60年以上にわたる活動のなかで、田名網自身が常に自らの表現方法を刷新し続けてきた稀有な感性を持ったアーティストであるからだといえるでしょう。また近年、田名網は海外文化を独自に受容した戦後日本の作家としても世界的に評価が進み、ニューヨーク近代美術館(アメリカ)、ウォーカー・アート・センター(アメリカ)、シカゴ美術館(アメリカ)、M+(香港)、ハンブルガー・バーンホフ(ドイツ)にも作品が所蔵されています。

本展は多方面から注目が集まる田名網が現在まで探究を続けている、虚実が入り混じった記憶のコラージュのような作品世界を存分に体感していただける待望の機会となるでしょう。

- ④ 『フレデリック・ロイースー臓器の劇場』 1987
アクリル絵具／キャンバス
145.5 x 145.5 x 3.6 cm
- ⑤ 『回廊』 1986
アクリル絵具、色鉛筆／キャンバスで裏打ちした紙
130.5 x 130.5 cm
- ⑥ 『昇天する家』 1987
木、ラッカー
101 x 63.5 x 24 cm
- ⑦ 『キリコ劇場』 2009
アクリル絵具／キャンバス
195 x 145.5 cm
- ⑧ 『気配』 2022
デジタルキャンバスプリント、雑誌の切り抜き
インク、アクリル絵具、クリスタルガラス／キャンバス
194 x 130 x 4cm



見どころ

1 日本の戦後文化史と密接に結びついた作品

アンディ・ウォーホルから影響を受けて制作された日本最初期のポップアートとも呼べる「ORDER MADE!!」シリーズ(1965)(⑨, ⑩)や、アメリカの『Avant Garde』誌が主催したベトナム反戦ポスターコンテストに入選した「NO MORE WAR」シリーズ(1967)、テレビ番組『11PM』のために制作されたコラージュの手法を用いたアニメーション、《Good-by Marilyn》(1971)など、戦後日本で展開されたカウンターカルチャーを物語る作品の数々が出品されます。



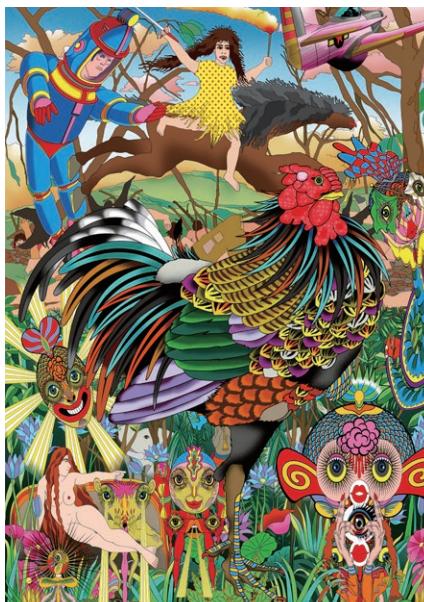
⑨



⑩

2 増幅を続ける「記憶」

近年、田名網は自身の過去の記憶や夢を主題とした作品を数多く制作しています。幼少期に体験した戦争や生死を彷彿た大病の経験を大きなきっかけとし、「人間は自らの記憶を無意識のうちに作り変えながら生きている」という説に基づいて、自身の脳内で増幅される「記憶」を主題に創作活動を続ける田名網。「記憶の冒険」と題された本展では、未発表の新作(⑪)に加え、田名網が70年代から断続的に記録してきた夢日記やドローイング(⑫)、関連するインスタレーション(⑬)も展示することで、尽きることのないその創造力の源泉に迫ります。



- ⑨ 《ORDER MADE!!》 1965
シルクスクリーン／紙
78.9 x 109.4 cm
- ⑩ 《ORDER MADE!!》 1965
シルクスクリーン／紙
101 x 73cm
- ⑪ 《森の旋》 2024
顔料インク、アクリル・シルクスクリーン、ガラスの粉末、ラメ、アクリル絵具／カンヴァス
251 x 200 cm
- ⑫ 《金魚》 1982
アクリル絵具、インク、色鉛筆／紙
56.5 x 76.5 cm
- ⑬ 「記憶の修築」展示風景：「田名網敬一 記憶の冒険」
NANZUKA、東京、2020年



⑫



⑬



3 変幻自在なコラボレーション

田名網は、その長いキャリアを通して多種多様なクライアントワークやコラボレーションを行ってきました。Mary Quant、adidas (14)、JUNYA WATANABE、Ground Yなどのファッショングループや、GENERATIONS from EXILE TRIBE、八代亜紀、RADWIMPS (15) といったミュージシャンと協働する一方で、ウルトラマンなどのキャラクターや生前交流があった赤塚不二夫 (16) とコラボレーションした作品も制作しています。本展では田名網のデザイナーとしての活動にも焦点を当て、当初からコラボレーションの意識を強く持ち、それによって生じる化学反応から新たな作品を作り出していくことをする田名網の仕事について紹介します。



(14) 「夢の王国」 2018
顔料インク、アクリル・シルクスクリーン、ガラスの粉末、ラメ、アクリル絵具／キャンバス
140 x 100 × 4 cm

(15) 「RADWIMPS WORLD TOUR 2024 "The way you yawn, and the outcry of Peace"」
ためのアートワーク 2024
シルクスクリーン、ラメ／紙
51.7 x 41.7 cm

(16) 「ドカード」 2022
顔料インク、アクリル・シルクスクリーン、ガラスの粉末、ラメ、アクリル絵具／キャンバス
149 x 100 cm

プロフィール

田名網 敬一 (たなみ けいいち)

1936年東京生まれ。武蔵野美術大学卒業。アートディレクター、実験映像及びアニメーション作家、アーティスト、そのジャンルを横断した類まれな創作活動により、他の追随を許さない地位を築いている。近年の田名網の主要な展覧会として、「パラヴェンティ：田名網 敬一」(プラダ青山店、東京、2023年)、「マンハッタン・ユニヴァース」(ヴィーナス・オーヴァー・マンハッタン、ニューヨーク、2022年)、「世界を映す鏡」(NANZUKA UNDERGROUND、東京、2022年)、「Keiichi Tanaami」(ルツェルン美術館、スイス、2019年)、「Keiichi Tanaami」(ジェフリー・ダイチ、ニューヨーク、2019年)。また、グループ展としてポップアートの大回顧展「インターナショナル・ポップ」(ウォーカー・アート・センター、ダラス美術館、フィラデルフィア美術館、アメリカ、2015-2016年)、「世界はポップになる」(テート・モダン、ロンドン、2015年)などがある。パブリックコレクションに、ニューヨーク近代美術館(アメリカ)、ウォーカー・アート・センター(アメリカ)、シカゴ美術館(アメリカ)、M+ (香港)、ナショナル・ポートレート・ギャラリー(アメリカ)、ハンブルガー・バーンホフ(ドイツ)など多数。



(17) 「田名網敬一 ポスター・イラストレーション展」
西武百貨店渋谷店、東京、1968年

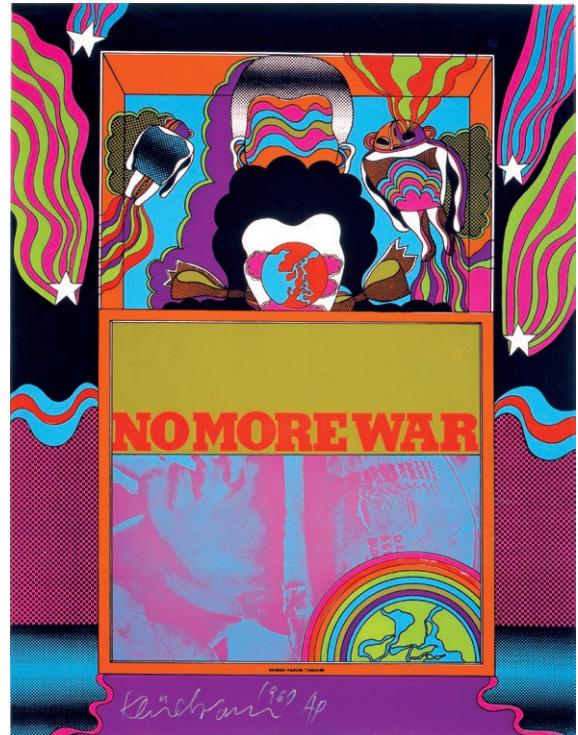
(18) 「パラヴェンティ：田名網敬一」プラダ青山店、東京、2023年



作品解説

「NO MORE WAR」シリーズ 1967年

田名網は学生時代から、作品がより多くの人の目に触れるような発表の形式を模索し、印刷や版画といった複製技術への関心を深めていきました。アメリカンコミックやポップ・アートの影響も受けつつ、60年代中頃からシルクスクリーンを用いた作品を制作し始めます。本シリーズもその一つで、アートとかウンターカルチャーを扱うアメリカの雑誌『Avant Garde』が1968年に主催した反戦ポスターのコンテストに出品され、優秀作に選ばれました。網点による背景、写真の流用、漫画を意識した構成に、この時期から作家の興味が印刷による複製にあることが明確に表されています。同時にこれらの特徴は、デザイナーとしてのレイアウトや色使いの技術に裏打ちされています。



19

《Good-by Marilyn》 1971年

田名網は幼少期から映像への関心を持ち続けており、60年代中頃にアニメーション制作を始めました。70年代初頭にはテレビ番組から依頼を受け、いくつかのアニメーションを作ります。その一つである本作では、ホットドックやバナナとマリリン・モンローが反復的に登場し、エロティックな光景が4分半にわたって繰り広げられます。自由の女神、ディズニーといったイメージやポルノグラフィの切り抜きも随所に散りばめられ、アメリカ大衆文化の独自な解釈が表現されています。ただタイトルにも暗示されているように、この時期を境に田名網は徐々にアメリカのシンボルから離れ、作品の主題を自身の記憶へと変化させていきます。本作はその過渡期に作られた作品といえます。



20

⑯ 《NO MORE WAR》 1967
シルクスクリーン／紙
63 x 48 cm

タグチアートコレクション蔵

㉐ 《Good-by Marilyn》 1971

16ミリフィルム（デジタル版）

制作・アニメーション：田名網敬一

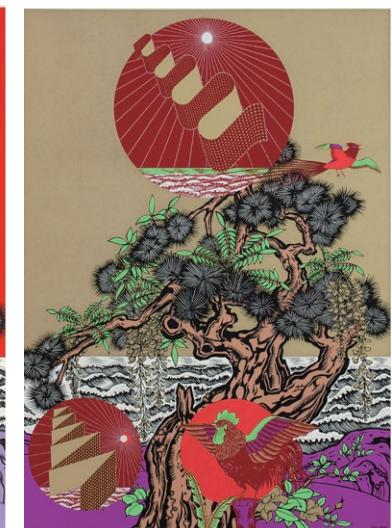
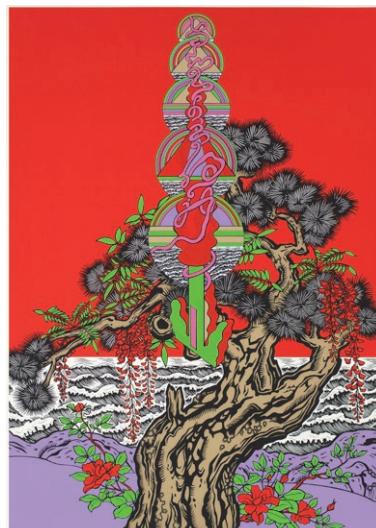
歌：平山三紀「真夏の出来事」

4分23秒



「常磐松」シリーズ 1986–87年

田名網は1981年に結核と診断され、4か月近く入院することになりました。生死をさまようなかで、夜ごとに薬の強い副作用で幻覚にうなされる日々を過ごします。幻覚にはサルバドール・ダリの絵画《ポルト・リガトの聖母》などが連日登場し、さらに病院の庭にあった松の木がぐにゃぐにゃと曲がって見えたといいます。この時のイメージを記録したノートは10冊にわたり、入院中の幻覚体験は田名網を新たな創作へと向かわせることとなります。1980年に中国を訪れていたことからアジア文化への回帰も加わり、松の木と人工的な都市のイメージが組み合わされることで、80年代には未知なる精神世界を表す楽園や迷宮を思わせる奇想的な世界が描かれるようになります。



21

22

《死と再生のドラマ》 2019年

極彩色で彩られた本作は、戦争を経験した田名網の幼少期の記憶と強く結びついたモチーフの数々から構成されています。田名網にとって「死」は切り離せない主題であり、創作のエネルギーでもあり続けてきました。本作では多数の戦闘機が海に沈みながら妖怪のような生き物が中空を漂い、輪廻転生を思わせる混沌とした世界が繰り広げられています。また、制作手法において田名網は2000年代以降デジタルでデータを起こすようになり、他のメディアへもイメージを無限に増幅させることができました。映像作品や立体までへも軽々とイメージを展開させていく様は、田名網の多様なアーティストとしての側面を昨今ますます強調しているといえるでしょう。



- ② 『常磐松』1986
シルクスクリーン／紙
103 x 73 cm
② 『常磐松』1986
シルクスクリーン／紙
103 x 73 cm
② 『死と再生のドラマ』2019
顔料インク、アクリル・シルクスクリーン、
ガラスの粉末、ラメ、アクリル絵具／カ
ングヴァス
200 x 400 cm (4枚組)



「ピカソ母子像の悦楽」シリーズ 2020年-

コロナ禍は田名網の作品制作にも変化を及ぼしました。予定されていた展覧会などのスケジュールが変更となり、田名網は空白の時間を埋めるようにして以前から好んでいたピカソの絵画「母子像」を模写することを始めます。当初は10枚程度のみ描くつもりでしたが、次第に数が増え、現在までに約500点以上が制作されています。制約がある方が自身の創造力を発展させられると語る田名網はピカソの母子像をフォーマットに様々なモチーフを組み合わせることで、このシリーズを通して自らのストーリーを開拓させていきます。田名網にとって本シリーズの制作は写経に近い感覚を与えるもので、生活のルーティーンとして現在も続けています。



④

⑤

《綺想体》 2019年

本立体作品では複数の顔が積み重ねられており、それぞれの力強い眼差しがこちらを見つめてきます。ドクロやクモ、ニワトリ、金魚、うねる松の木などが複雑に組み合わされて一体化することで、まるで一つの命を持っている生き物かのように感じられます。田名網は作品に頻繁に現れる奇妙な姿形の生き物たちのことを、戦争で傷ついた人々であり、恐れることを知らない私たち自身だと語ります。2000年代からは千手観音などの仏像に着想を得た立体作品を制作しており、「自在に変容する脅威の尊像に興味が尽きない」と語っています。本作は異形の仏像のようでもあり、田名網が考える極楽浄土の世界の生き物が表されています。



8

④ 《ピカソ母子像の悦楽》2020/2021
アクリル絵具／カンヴァス
41 x 31.8 x 2 cm

⑤ 《ピカソ母子像の悦楽》2020/2021
アクリル絵具／カンヴァス
30 x 30 x 3.7 cm

⑥ 《綺想体》2019
FRP、鉄、アクリル・ウレタン塗料、金箔
301 x 100 x 100 cm

田名網敬一 記憶の冒険

Keiichi Tanaami
Adventures in Memory

開催概要

展覧会名	田名網敬一 記憶の冒険
会期	2024年8月7日(水)～11月11日(月)
休館日	毎週火曜日
開館時間	10:00～18:00
	※毎週金・土曜日は20:00まで
	※入場は閉館の30分前まで
会場	国立新美術館 企画展示室1E
主催	国立新美術館、朝日新聞社、独立行政法人日本芸術文化振興会、文化庁
協賛	集英社、adidas、MATTEL CREATIONS™
制作協力	ソニー・ミュージックエンタテインメント
協力	NANZUKA
後援	J-WAVE
観覧料(税込)	一般2,000円、大学生1,400円、高校生1,000円
	※中学生以下は入場無料。
	※障害者手帳をご持参の方(付添の方1名含む)は入場無料。
	チケット情報は後日、国立新美術館ホームページ等でお知らせします。

新 国立新美術館 朝日新聞社

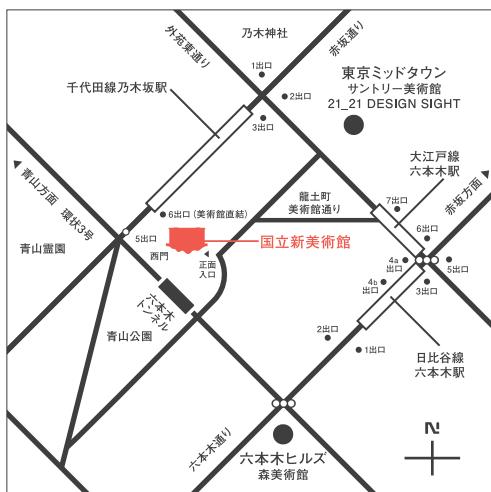
JAPAN CULTURAL EXPO 2.0

令和6年度日本博2.0事業(委託型)

集英社



MATTEL CREATIONS™



アクセス

東京メトロ千代田線 乃木坂駅 青山霊園方面改札6出口(美術館直結)

東京メトロ日比谷線 六本木駅 4a出口から徒歩約5分

都営地下鉄大江戸線 六本木駅 7出口から徒歩約4分

※美術館に駐車場はございません。

〒106-8558 東京都港区六本木7-22-2

お問合せ: 050-5541-8600(ハローダイヤル)

美術館ホームページ: <https://www.nact.jp>

展覧会公式SNS: @tanaami2024



報道関係のお問い合わせ

「田名網敬一 記憶の冒険」 広報事務局(株式会社 OHANA内)

〒102-0074 東京都千代田区九段南1-5-6 リソナ九段ビル5F

E-mail: tanaami2024@ohanapr.co.jp

(平日 10:00-17:00 * 土日祝日の対応はしておりません)